

「伊香保の万葉集について学ぶ」

群馬県立女子大学教授 北川和秀

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 — 東山道	
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 上野 22首 下野 2首 陸奥 3首		東海道 — 東山道
	譬喩歌 9	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 上野 3首 陸奥 1首		東海道 — 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首		
		合計	230首	

◎「いかほ」の語源について

○古代の「いかほ」は榛名山のこと。

- ・「いかほ」は「いか」＋「ほ」と考えられる。
- ・「ほ」は、とがったもの。抜きん出たもの。稲穂、槍の穂先、波の穂、炎（火の穂）。ここは、山や山頂の意。「高千穂」「穂高」などの「ほ」と同じ。
- ・「いか」は、内部の力が充実して、それが外に角張って現れている状態。厳めし、怒る、雷などの「イカ」。
- ・「いかほ」の「いか」は、山の姿か、活火山か、雷か。

3421 伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ

伊香保の峰に雷よ鳴ってくれますな。私にとっては別にどうということはないのですが、あの娘が怖がるものでね。

「かみ」は雷。「かみなり」の原義は「神鳴り」である。「な……そね」は「な……そ」と同じく、婉曲な禁止をあらわす。「わがへ」は「わが上」。「故」は「支障」。「子ら」は、愛しく思う娘。接尾辞「ら」は親愛の情をあらわす。

群馬県は雷の多い県として知られているが、中でも榛名山のあたりは雷の発生源、通り道になっていて、ことのほか雷が多い。この歌は、雷が苦手な恋人を心配している男の歌である。ことさらに「吾が上には故はなけども」と断っているのがほほえましい。わざわざこのように断るところをみると、この男も実は雷が多少とも怖いのであろう。

3422 伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり

伊香保風は、吹く日も吹かない日もあると言いますが、私があなたを思う恋心ばかりは、止むときがありません。

「伊香保風」は、伊香保の地で吹く風、あるいは伊香保の山から吹き下ろしてくる風。「し」は強意の助詞。

秋の終わりから春先に掛けて、榛名山からは、「からつ風」と呼ばれる強い北西の季節風が吹き下ろす。この季節、毎日のように強い風が吹くが、吹かない日もある。「有名な榛名嵐だつて、時には吹かない日もあるというのに、私の恋心はいつも変わらない」とうたっている。

(参考)  
韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし(巻十五・三六七〇)  
荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ(巻十七・三八九一)

3414 伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば

伊香保の高い井堰の上に現れる虹がはつきりと見えるように、そのようにはつきりと二人の仲が明らかになってしまおうほど一緒に寝ていられたらなあ。

「八」は、実数の「八」をあらわす他に、「多数」「多量」の意味もある。「尺」は長さの単位。ここの「八尺」は実数ではなく、「高い」ということであろう。「やさか」を地名とする説もある。「井手」は灌漑のために川の水を塞ぎ止めた場所。井堰。虹を「のじ」と言うのは東国方言。「頭ろ」も「頭るる」の東国方言。上三句は「頭ろ」の序詞。

人目（特に、女の母親か）を気にして、十分に共寝をすることができない男の歎きと願望とをうたった歌。なお、万葉集中、虹をよんだ歌はこの一首のみである。

3415 上毛野伊香保の沼に植多小水葱かく恋ひむとや種求めけむ

上野国の伊香保の沼に植えている小水葱ではないけれど、私はこんなに恋に苦しもうとして、わざわざ種（原因）を求めたのだったかなあ。

「伊香保の沼」は現在の榛名湖とされる。しかし、標高の高い榛名湖では小水葱は育たないとして、榛名山麓の湿地沼沢を指すとする説もある。「小水葱」は水草の一種で、みずあおい科の一年草。水田や小川に自生し、葉や芽を食用にする。夏から秋にかけて咲く紫色の花は染料になる。上三句は「種求め」を導く序詞。小水葱は、種を蒔いて育て、また種を取る。「や」は反語。「種」は原因。女と共寝をしたことを指す。

自ら求めて好きな女と共寝をし、思いを遂げたはずなのに、共寝をしたからこそ、恋しさがかえって募ったのである。

3410 伊香保ろの岨の榛原ねもころに将来をなかねそ現在し良かば

（伊香保の峰の急斜面に広がる榛の木の間では、地中で根が絡み合って凝り固まっている、そのネモコロではないが）ネモコロに（こまごまと）これから先のことを心配しないでください。今さえ幸せならば。

「岨」は急斜面。「聳ゆ」と同根の語。あるいは「沿ひ」の意にとつて、隣接したところとする説もある。「榛」はハンノキ。「ねもころ」は、植物の根が土中で細かに絡み合っているさま。そこから、「細かく見るさま」「細やかに心遣いするさま」という意味に用いられる。後に音韻変化して「ねんごろ」という語形になった。「伊香保ろの岨の榛原」は「ねもころに」を導くための序。「かぬ」は現在の時点で将来のことを考えること。「し」は強意の助詞。「良かば」は「良ければ」の方言形。

先々のことを慎重に考えている女に対して、今のことを第一に考えている男の歌か。あるいは、男女は逆かもしれない。どちらもあり得そうである。

（参考）

吾が恋は現在もかなし草枕多胡の入野の将来もかなしも（巻十四・三四〇三）

3435 伊香保ろの岨の榛原吾が衣に着きよらしもよひたへと思へば

伊香保の峰の急斜面に広がる榛原の榛は、私の衣服によくなじんで染めてくれます。私の着物は一重のものですから。

榛の樹皮や実は染料に用いる。「よらし」は「よろし」の古形。染まり具合がよい。「もよ」は詠嘆。「ひたへ」は「一重」の方言形。裏地が付いていない着物。「ひたへ」を「純袴」のつづまった形とする説もある。袴は楮の繊維、またはそれで織った布。

「榛原」に女を、「吾が衣」に自分を譬える。「着きよらし」は相手とよくなじむ。相性がよいこと。「ひたへ」は、自分が裏もなく一途に相手を思っていること。全体の意味は、「あの娘の心は、私の心としつくりとなじみます。それは、私がひたすらにあの娘のことを思っているからです」となる。

3423 上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり

可美都気努 伊可抱乃祢呂尔 布路与伎能 遊吉須宜可提奴 伊毛賀伊敏乃安多里

上野国の伊香保の峰に降る「雪」ではありませんが、たやすく「行き」過ぎることができない、あなたの家のあたりよ。

上三句「上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の」は、「雪」の類音の「行き」を導くための序詞。「雪」を「よき」と言うのは東国方言であろう。「降る」は「降る」の方言形。「かて」は可能の意味の補助動詞「かつ」の未然形。「かてぬ」は、それに打消の助動詞が付いたもので、「くすることができない」。

「雪」と「行き」との同音による序詞の例としては、万葉集に「我がやどの君松の木に降る雪の行きには行かじ待にし待たむ」（巻六・一〇四一）という歌がある。ところが、伊香保の歌では「雪」は「よき」という語形であり、「行き」と同音ではない。その点で多少無理をした序詞といえよう。「降る雪のために難渋して通り過ぎるのが困難なように」という意味合いも含むか。

3409 伊香保ろに天雲い継ぎかぬまづく人とおたはふいざ寝しめとら

伊香保呂尔 安麻久母伊都藝 可奴麻豆久 比等登於多波布 伊射祢志米刀羅

伊香保の峰に雲が次々にかかるように「かぬまづく人とおたはふ」さあ共寝をさせて「やう」。

難解な歌である。「かぬまづく」「おたはふ」「とら」が語義未詳のため、歌全体の意味がとれない。

「伊香保ろ」は今の榛名山。「い継ぎ」の「い」は移動に関する動詞に付くことが多い接頭語。「かぬまづく」は「雲がかぬま（地名）に及んで」とする説、前後の文脈から「しきりに」という意味にとる説などがある。「おたはふ」は「叫ぶ」と関係づけて「言い騒ぐ」とする説、「穏ひ」と関連づけて「静まる」とする説がある。「とら」は助詞とする説、「子ら」の方言形とする説、女性の名とする説などがある。

(参考)

岩の上にい懸る雲のかのまづく人ぞおたはふいざ寝しめとら（巻十四・三五八）

3419 伊香保せよ奈可中次下思ひどろくまこそしつと忘れせなふも

伊可保世欲 奈可中次下 於毛比度路 久麻許曾之都等 和須礼西奈布母

伊香保に住むあなた。「奈可中次下」思い出します。「くまこそしつと」私は忘れません。

極めて難解な歌で、断片的にしか意味がとれない。特に第二句は訓読すら困難である。第二句は五文字であるから、七音に訓むためには、どの二文字かを二音で訓まなければならぬ。しかし、万葉集東歌に用いられている漢字は延べ七五四〇字あるうち、その九九・五％は一字を一音に訓む文字である。一字二音の音仮名は国名に限られ、一字二音とおぼしき訓字は三字三例に過ぎない。東歌で一字二音の例は極めて稀なのである。この歌には誤字・脱字のある可能性が高いといえよう。

「伊香保せよ」は「伊香保背よ」（伊香保に住んでいるわが夫よ）、また「伊香保瀬よ」（伊香保の湖の川瀬から）と解する説がある。「おもひどろ」は「思ひ出る」の方言形か。「なふ」は上代東国語の打消の助動詞。「も」は詠嘆。